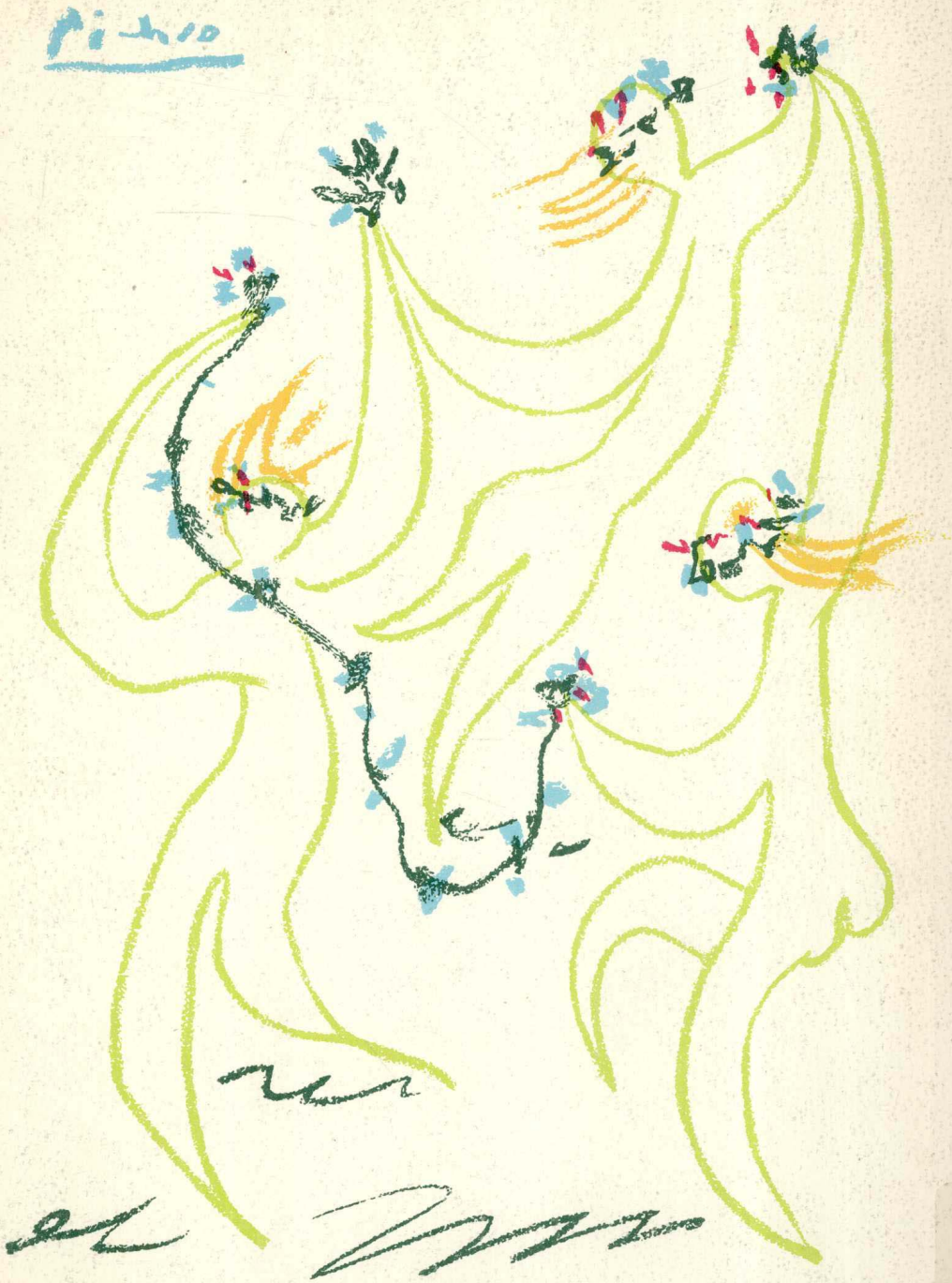

Picasso

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　3

ギェレルプ
ポントピダン
シュピッテラー

訳者　林　穣二
竹内孝次
高橋健二
望月芳郎
安西徹雄

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和47年9月5日　発　行
発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台 1-6
郵便番号 101
振替 東京 180 番
電話 東京(03)294-1111(大代表)
印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1972 Printed in Japan
0397-522034-3062

編集顧問

川端康成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山室　静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原　弘

第6回日本翻訳出版文化賞受賞

ノーベル賞文学全集　全24巻　別巻1

❶ シェンキェーヴィチ　キプリング　(訳)木村彰一　飯島淳秀
❷ ロマン・ロラン　イェンセン　(訳)宇佐見英治　山口三夫　河盛好蔵　竹内孝次
❸ ポントピダン　ギェレルプ　シュピッテラー　(訳)竹内孝次　林穣二　高橋健二
❹ ハムスン　アナトール・フランス　レイモント　(訳)山室静　伊吹武彦　鈴木力衛　米川和夫他
❺ デレッダ　ウンセット　シンクレア・ルイス　(訳)大久保昭男　稲富正彦　刈田元司
❻ トーマス・マン　ゴールズワージ　(訳)浅井真男　佐藤晃一　渥美昭夫
❼ ブーニン　パール・バック　シランペー　(訳)原卓也　村岡花子　佐藤亮一　桑木務
❽ マルタン・デュ・ガール　ピランデッロ　(訳)青柳瑞穂　米川良夫
❾ ヘルマン・ヘッセ　パウル・ハイゼ　(訳)高橋健二　小塩節
❿ アンドレ・ジッド　モーリヤック　(訳)若林真　片岡美智　堀口大学　白井浩司　井上究一郎
⓫ フォークナー　ラーゲルクヴィスト　(訳)速川浩　山口琢磨
⓬ ヘミングウェイ　(訳)石一郎　高村勝治
⓭ ラックスネス　カミュ　アンドリッチ　(訳)山室静　渡辺守章　鬼頭哲人　栗原成郎
⓮ パステルナーク　ショーロホフ　アストゥリアス　(訳)工藤幸雄　工藤精一郎　鼓直他
⓯ スタインベック　アグノン　(訳)大橋吉之輔　村岡崇光他
⓰ 川端康成
⓱ ベケット　ソルジェニーツィン　(訳)安堂信也　高橋康也　江川卓　水野忠夫
⓲ ラーゲルレーヴ　メーテルリンク　ヒメネス　(訳)香川鉄蔵　川口篤　長南実
⓳ ビョルンソン　エチェガライ　ハウプトマン　ベナベンテ　(訳)毛利三弥　荒井正道　秋山英夫他
⓴ イェイツ　ショー　オニール　(訳)高松雄一　出淵博　尾島庄太郎　福田恆存　倉橋健　菅泰男
㉑ モムゼン　オイケン　ベルグソン　(訳)長谷川博隆　氷上英広　松浪信三郎
㉒ ラッセル　チャーチル　(訳)大竹勝　佐藤亮一
㉓ シュリィ・プリュドム　F・ミストラル　カルドゥッチ　タゴール　ヘイデンスタム　カールフェルト　(訳)川崎竹一　杉冨士雄　河島英昭　福田陸太郎　田中三千夫他
㉔ G・ミストラル　T・S・エリオット　クワジーモド　サン＝ジョン・ペルス　セフェリス　ネリー・ザックス　(訳)荒井正道　福田恆存　河島英昭　多田智満子　秋山健　生野幸吉

別巻　ノーベル賞物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ギェレルプ

選考経過…アルフレッド・ジョリヴェ……林　穣二訳…6
伝記的・批評的エッセイ…スヴェン・セーデルマン……林　穣二訳…9

十クローネ・その他の物語……林　穣二訳…13

人と作品…ビレスコウ　ヤンセン……林　穣二訳…73
著作目録……林　穣二編…400

ポントピダン

選考経過…グンナー・アールストレーム……竹内孝次訳…84

幸運者ペア（抄）……竹内孝次訳…89

人と作品……竹内孝次……291
著作目録……竹内孝次編……402

シュピッテラー

選考経過…シェル・ストレムベリイ……高橋健二
授与演説…ハラルド・イェルネ……望月芳郎訳……302
高橋健二
安西徹雄訳……305

イマーゴー

……高橋健二訳……309
人と作品……高橋健二……393
著作目録……高橋健二編……404

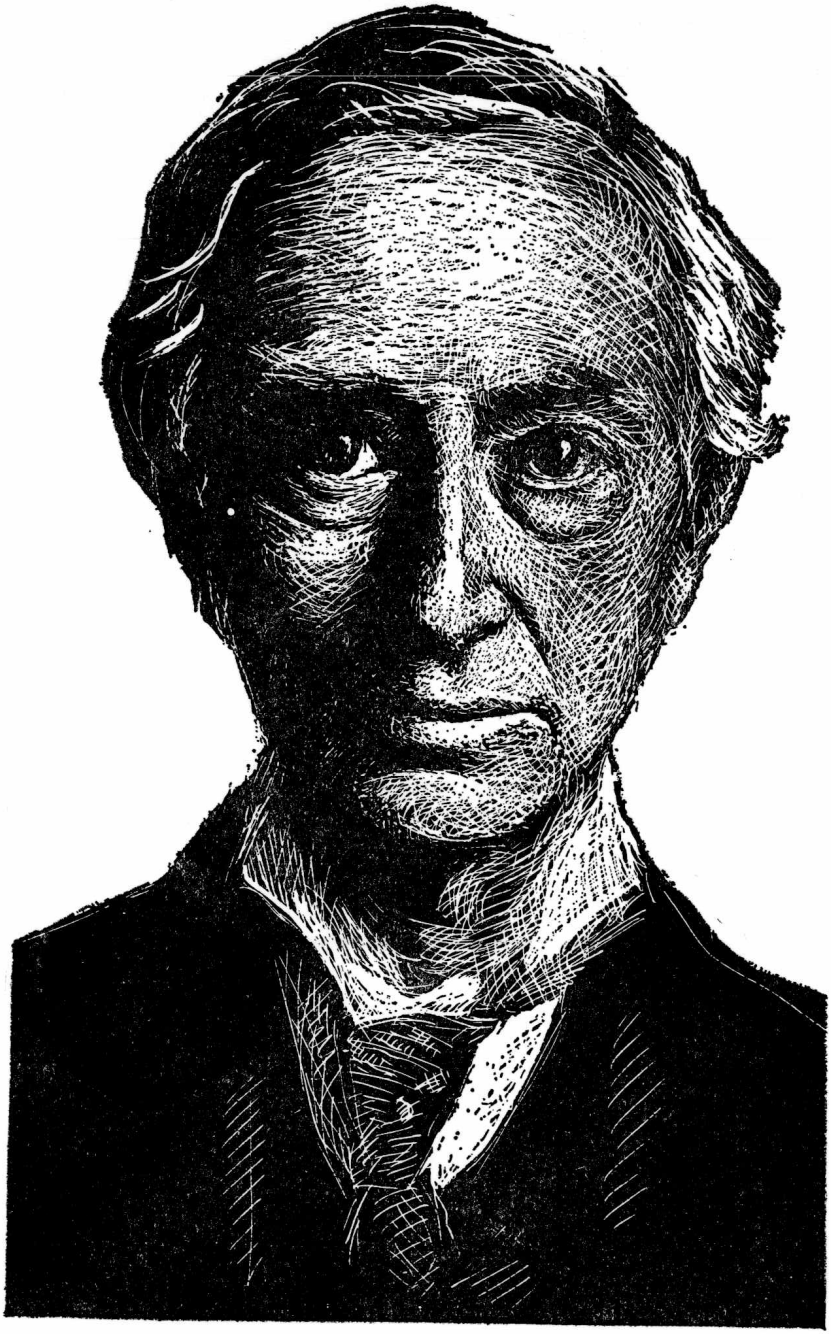
肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、82、299
カラーさしえ／メイ・ニーマ……80～81
レオノール・フィニ……296～297
R・マルティアル……328～329、376～377

カール・ギェレルプ

一九一七年受賞（六十歳）

（デンマーク　一八五七～一九一九）

十クローネ・その他の物語



Karl Gjellerup

ギェレルプ

選考経過

伝記的・批評的エッセイ

カール・ギェレルプに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

パリ大学文理学部名誉教授
アルフレッド・ジョリヴェ

一九一七年の年末、ヨーロッパのほとんどすべての国は、戦争に従事していた。この戦争は、いつ、どのように終わるか、予測がつかなかった。これら諸国の作家たちのうち、すくなくとも戦争の混乱のなかにいなかった者は、それぞれの部署と階級とに応じて、市民としての義務を果たしていた。これらの作家はだれもノーベル賞を受けることができなかった。自明のことで説明の必要もない。

前の年、スウェーデン・アカデミーは、スウェーデンの作家、ヴェルネル・フォン・ヘイデンスタムに栄冠を与えた。彼は、スウェーデン文学の大貴族で、一九一五年に、その最後の、しかもおそらくもっとも美しい作品『新詩集』を発表していた。この作品には、ゲーテのもっとも完全な抒情詩の成功を想起させ、その水準にまで達しているものがある。この選考はすばらしいものであり、だれもこれに対して異議を唱えようとする者はなかった。だが、一九一七年には、アカデミーはどの作家に投票しようとするのか？　伝統に従って協議を重ね、若干の人たちがアカデミーを指導しようとして助言をした結果、二人の候補者が頭を出してきた。二人ともデンマークの小説家で、カール・ギェレルプとヘンリク・ポントピダンである。二人について、どうやって決戦投票をしたらよいか？「それぞれ派閥を持っており、有力な票をつかんでいた。」前年栄誉を獲得したヴェルネル・フォン・ヘイデンスタムは、ギェレルプ支持に傾いた。彼は深遠な傾向の持ち主だから、ライバルにはなり得ない。ところで、傾向というものは、ことに深遠な傾向は、かならず客観性をくもらせるものである。「過ちをおかすということは、人間の本性である」

ヴェルネル・フォン・ヘイデンスタムは、古いタイプの貴族だった。威風堂々たる貴人だった。彼の悲劇は、自分の階級の人びとが、スウェーデン人の社会で、その重要性と影響力をまったく失おうとしている時代に生まれたということだった。彼はつねに、彼以前にスウェーデンで実行に移されていたリアリズムを嫌った。こんな「靴屋のリアリズム」と、軽蔑して書いた。彼は、理想主義が浸透していない芸術作品を考えることができなかった。そのなかで魂が高らかに動く抒情詩的テーマや、一つの家系の魂ないしは国民の英雄的行為が表明される歴史の特権的な瞬間に出会うために、日常の現実生活から離れないような作品は考えられないのだった。ところで、ギェレルプは、ゲオルク・ブランデスの傍で革命家のポーズをとった後、大きな騒音を立てて師匠のブランデスから去って、ドイツにインスピレーションを求め、主としてシラーの著作から取り入れて、理想主義＝観念論的な作品に盛り込んだ。彼はまたゲルマン民族の根源にさかのぼって、ワーグナーの音楽に熱中し、ニーベルンゲンのシリーズの主題と英雄的な人物は、ゲルマン民族にとってその深い存在と本来の長所の啓示であり、まことに高貴な存在へ向かって指導するものであると、欣然として主張した。

ヘイデンスタムは、ギェレルプの作品に共鳴せずにはいられなかった。この作品の芸術的な欠陥などどうでもいい。ヘイデンスタムは、文壇にデビューした当初は、偉大な論客として成功を博した。当時の思い出と気質が、まだ彼に残っていた。ところで、論戦と明察とは相容れないものである。

さて、コペンハーゲンに、一人の文学史家の大学教授がいた。彼の労作、ことにデンマークの十八世紀に関する著作は、単にデンマークだけでなく、北欧諸国全部、特にスウェーデンで、ひじょうな名声を博していた。その名はヴィルヘルム・アンデルセン。その見解は、ストックホルムの委員会で、大変重視されていた。一九一六年以来、ヴィルヘルム・アンデルセンは、デンマークの作家のためにノーベル賞を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

獲得することを夢見ていた。ところが、人も知るとおり、それをスウェーデンの詩人ヘイデンスタムに持っていかれてしまった。一九一七年に、ヴィルヘルム・アンデルセンは、もう一度同じ努力をした。不思議なことに、彼はギェレルプを候補として推した。不思議なことに、というのは、同じ一九一七年に、彼は、ヘンリク・ポントピダンに関する名著を出版しようとしていたからである。

コペンハーゲン大学には、ひじょうに高名な言語学者オトー・イェスパーセンもいた。彼はスウェーデンでも、デンマークにおけると同じくらい知られていて、そのアカデミー会員に対する権威は、ヴィルヘルム・アンデルセンにも匹敵するものがあった。ところで、彼は、徹頭徹尾ポントピダンの味方をする約束をしていた。ノーベル賞委員会は、決断がつかなかった。この膠着状態から脱却するため、ヴィルヘルム・アンデルセンは、ソロモン王の故知にならって意見を述べ、子供を二つに切ること、つまり賞を二つに分けることを提案した。そのとおりのことがおこなわれ、手術が完了した。ヴィルヘルム・アンデルセンは凱歌を挙げて、二人の候補者はほんとうに同等だと言った。それに、二人とも同じように牧師の子でないか？　この同等性は、世論によって認められなければ、そう長つづきするものではなかった。地すべりが起きて、二人を互いにだんだんと離していった。ギェレルプは、デンマーク小説界の巨匠の一人、ポントピダンと、腕くらべすることができなかった。

一九一七年以後、多くのデンマーク人が、ギェレルプの人物がすこし変わっていると思った。ライバルのポントピダンの小説『夜の番』のなかに、ギェレルプの実際より多少良く描かれた肖像があるのには、ビリッとしたものが感じられる、彼は、この小説のなかに、フォーレヘーヴェという名で現われる。「彼はローマで大成功をおさめている、ことにご婦人方のあいだで。なぜならば、彼は、ほかのこともいろいろしていたが、なかんずく、製本した自分のアハスヴェルスや、リチャード獅子王や、ロベス・ビエールや、コーフォドの『一般史』から入念に抜粋した本に対する献呈の申し出を受けるのを歓迎しているからだ。彼は、こういう本のために、わが国では大作家になった。成功した結果、彼が傲慢になったとは言えないだろう。わたしは、生涯をつうじて、このなりふりかまわない小紳士ほど、もったいぶっていない人を見たことがない。この人の背中は、あまりにも大勢の人から謙虚な尊敬の視線を集めすぎて曲がってしまったようだ。この人は、だれかにショックを与えるといけないと思って、部屋を横切ることもできないし、たえず『失礼します』『ほんとうにありがとうございます』『ああ、どうぞおかまいなく』などとつぶやいている。要するに、デンマーク詩壇に受け入れられるための性格と才能として常に必要な、柔軟性のある脊柱と、物事に動じないやさしさの持ち主である」

一九二五年の別の小説もまた、同じように、ギェレルプをフリッツ・マリングという名の下に登場させている。それは、『緒戦』という題の、スヴェン・ランゲの小説で、ブランデス一派が、デンマーク人の反動的傾向に対して挑みかけた戦闘を扱っている。フリッツ・マリングがドイツから帰ってくる。自分がシラーの化身だと思っているものだから、シラー風の襟をつけている。彼は、議論をしすぎて息切れがしている。鳥のような横顔は青ざめ、両方の眉は額の真ん中まで突き立っている。彼は、まだ、ブランデスの熱烈な弟子で、ブランデスのことを聖ジョージと比較し、ブランデスが描写したド・クルーデナー夫人の肖像につけられた誇張した賛辞のあとに、こうつけ加える。「わたしは、いつもこのような人びとに特別の興味を持っていた。改宗する人びとに、いわば信者の群れをはなれる人びとに、歴史上のすべての大小の背信者たちに、興味を持っていた。それでは彼は背信者が生じる原因となる気質が自分にあると感じていたのか？　と人は彼に質問する。彼はあわてて否定する。しかし、助手の一人が、二度も彼に向かって言い放つ。『そんなに自信をもって言えないのではないですか！』と」この場面は一八九七年ごろに書かれた。ギェレルプが変節するまでには、もうあまりながいことはなかった。

彼の小説や戯曲は、もはや、できるだけ多数の書物を読むことを職業とする人びと以外には読まれない。いまでも注目をあびているのは、彼の旅行記だけだ。『古典の月』(一八八四)のなかに記されたギリシアの描写を読めば、彼の理解力が本物だったことがわかる。この書物の冒頭には、ヴェニスに関する部分がある。波と潟の奏でる音楽の

華麗な調べがすこしばかり。それから宮殿の唄。特にワーグナーが死んだ場所、ヴェンドラミーニ宮殿の唄。ガブリエーレ・ダヌンチオの『エピファニア・デル・フオコ』を思わせるものがある。

彼の詩の抜粋をここに二つ紹介させてもらおう――なぜならば、彼は詩人でもあったから。

その一つは、一八八三年ローマで『ニーベルンゲンの輪』が上演されたあと作られた詩である。そのなかに次の数行がある。「ヴァルキューレたちの乗った馬が、雷のような音を立てながら、木のはえた山頂をとおってゆく。翼の生えた種馬の蹄に蹴散らされて、黒雲のようなほこりのさ中に火花が飛び散る。英雄たちの血のほとばしる死体が頭鞍にぶらさがっている。野性の牝馬のいなきが、戦う処女たちの叫び声にまじってきこえる。わたしはここで何をしているのか？　自分の生命の琴線を満足させてくれるような反応に出会うことのないこの場所で。わたしは異邦人だ。敵だ。ゲルマン人だ。野蛮人だ」

彼は一八八八年に皇帝フレデリック三世の死を悼む詩を書いて、われわれみんなの母で、分裂に悩んでいる、エウロペの女神（ヨーロッパのこと）に語りかけた。善良なヨーロッパ人であるギェレルプは、無難に解決策を見出した。「暴君と無政府主義者を捕えよ。エウロペの女神よ。あなたはずっと以前からよりどころを探した揚句、あなたの真ん中に建てられたこの玉座に視線をそそいでいる。……あなたにふさわしいのは、この男らしいドイツ人だ。フランスは、拍手をもって、おどけたペテン師を迎え、ロシアは沈黙するツァーによってさるぐつわをはめられているとき」

このような抜粋を見れば、われらのノーベル賞のおかれた位置とその傾向について、かなり適確な概念を把握することができるというものではないだろうか？　（林　穣二訳）

第一次世界大戦の結果、また、ながい間つづいた混乱状態の結果、戦闘が終了した後においても、ノーベル賞の授与は、一九一六年から一九一九年までの期間は、なんらの儀式なしにおこなわれた。（編集者注）

伝記的・批評的エッセイ

評論家
スヴェン・セーデルマン

カール・ギェレルプは、一八五七年に生まれ、一九一九年十月十三日に死んだ。ヘンリク・ポントピダンと同じように、牧師の家系の出身である。彼自身も聖職を志したが、特に強い宗教的な動機があったわけではない。むしろ文学への強い傾斜があって、『食うための勉強』と同時に、ギリシア、イギリス、それから特にドイツ文学を耽読した。神学の勉強をしながらも、徐々に神学に対して否定的な態度をとるようになり、ゲオルク・ブランデスをリーダーとする文学上の急進主義に惹きつけられた。一八七八年に、エピゴーノスというペンネームで、『観念論者』という短編小説を書いて、文壇にデビューした。それにつづいて、彼は、短い間隔をおいて、一連の物語や詩を書いて、神学に対して熱狂的な攻撃を加え、ダーウィンと進化論とを強く信奉する姿勢をとった。

この反神学的論戦の第一期は、さほど独創的なものではなかったが、これに引きつづいて、外国旅行に出て、自分の思想を取りまとめて、知的均衡を見出そうとした。同時に、彼の文才も、より明確な輪郭を示すようになった。『ロムルス』(一八八三)、親密さの肖像画ともいえる美しい短編『ト長調』(一八八三)、それから、特に、この時期の代表作である偉大な戯曲『ブリューンヒルド』(一八八四)などが出たのは、この時期である。この戯曲のテーマは、ヴォルスンガ・サガのなかの、シーグルドとブリュンヒルデが、同じ山に居ながら、運命によって離されていて、お互いのことを夢に見、求めあうというエピソードである。こういうふうに、苦しみながら待っていること、静かに欲求していることが、この悲劇の基調として、詩的に、絵画的に、力強く豊かに表現されている。韻文は、特に古代風に構成されたコーラスの部分で、抒情詩としてきわめて美しいものとなっている。この作品は、その深さと、形式とにおいて、スケールの大きいものとなっている。それは、観念論と、道徳的昂揚の点で、同じ自然主義の時代に書かれた他の作品と、完全に対蹠的なものとなっている。ギェレルプは、自由な思想の持ち主ではあったが、自然主義とは、あまり共通性を持たなかった。反対に、彼は、ドイツ古典派や、古代の文学や、ワーグナーの豊かな感覚との方が関係が深かった。そして、この事実に気がつくと、『遍歴の年』(一八八五)という紀行書で、ブランデス学派から、はっきりと、しかも公然と袂別した。それ以後、彼の文学作品(戯曲、抒情詩、物語)は、観念論の方向を指したが、当初は、詩的才能の豊かさを盛り込んでいながらも、芸術的見地からは、必ずしも成功を収めなかった。この時期の末に発表した最良の佳作は小説『ミンナ』(一八八九)で、真に美しい恋物語であるとともに、女性心理のデリケートな研究として、スカンジナヴィアの小説中で、最高の地位にランクされるものである。

ここで、小説『風車』(一八九六)にも言及しよう。幅の広い基礎と、確固たる構成をそなえたこの小説は、自己の犯した罪を悔いて、自分を亡ぼす殺人犯人の精神状態の奇妙な分析で、偉大な悲劇的作品である。また、『ヘルマン・ヴァンデル』(一八九一)、『ヴートホルン』(一八九三)、『閣下』(一八九五)といった市民的現代劇は、芸術作品としてはやや劣るが、結婚とセックスに関するギェレルプの高い道徳観を示すものである。これらの戯曲は、結婚に関する提言ではない。作者は、結婚という概念を、通俗的な慣習を超えた高いものと見なし、そのように高いものと見なしたために、普通の結婚においては実現されないものとして描くのである。彼は、より純粋な形態として、自由な関係を提案する。そのような自由な関係は、人の生涯において唯一のものである限り、教会または国家の承認を受けなくても差しつかえないのである。

これらの戯曲は、個人主義的な反抗にもかかわらず、その傾向は宗教的であるが、著者の初期のものの考え方と、その創作活動にあってより重要な、最終期の特徴をなすものの考え方とのあいだの、過渡的な段階を形成している。彼は、傑作の一つをワーグナーにささげてい

るが、ワーグナーの楽劇に熱中しているうちに、個人の人格が抹殺されて、涅槃の普遍的な世界に帰一するという、仏教の慧智を研究するようになった。ギェレルプが二十世紀になってから書いた作品のうち、最良のものは、こういうインド的な考え方によって鼓舞されており、ヒンズー的なテーマを登場させて、それを詩的に、しかも観念論的に扱って、大方の賞讃の的となった。この時期は、『犠牲の火』(一九〇三)という題の戯曲ではじまった。この作品の主人公は、バラモン教の僧侶の若い弟子で、敬虔ではあるが単純な心で、教えを文字どおりに解釈して、三つのお供えの火をこの世に保存しようとする。その三つの火とは、魂の火と、愛の炎と、遺体を焼く火葬の焚木の火とである。ここでは、哲学的な思想が、調和を保ちながらも自由に、詩人の創作的想像力と結びついている。偉大な神秘小説『巡礼カマニータ』(一九〇六)は、仏陀の時代の歴史を含むものであるが、そこでは、仏教的世界観の要点と、その自己否定の教えと、完全を目ざす努力と、極楽浄土、涅槃、万物の破壊に関する夢とが解明されている。カマニータは、現世の快楽を求める男であるが、万物の脆さを悟って、永遠の財宝を望む。彼の現世的な生活だけでなく、『西方浄土』で彼が変容する状態が描かれており、インドの豊饒な熱帯的風土も再発見される。自己を否定した者は、ここに目醒めて、その蓮の蕾を捨てて、祝福された者の踊りに加わって、あらたな化身に変わろうとし、その後、彼らの魂は、三千年の回帰の仏陀の王国にあたらしく誕生する。ヒンズー教の哲学を繰り返しながらも、この詩には不思議な魅力がそなわっている。この詩人は、まったく直観的に、遠く離れた人びとの精神生活にはいり込んでしまったらしく、それらの人びとの夢を、幻覚をもった人の能力を発揮して、表現し得ている。この詩のなかには、アラビアン・ナイトの心を思わせるものがあり、西方浄土には、祝福された者たちの豪奢な生活が詳細に描かれている。これと同様に、戯曲『完成された者の妻』(一九〇七)も傑作で、仏陀の妻が完全な者になるために経過しなければならない浄化の過程を描いている。著者は、千年の歴史を有する哲学の独断論的・哲学的天啓を透過して、自分自身の性格と才能を発揮させることに成功している。ギェレルプの最後の大作『世界の遍歴者たち』(一九一〇)には、半ば東洋的、半ば西洋的なモラルが説かれているが、上述の諸作ほどには芸術的な価値に到達しなかった。しかしながら、細部に美しい個所もあるし、想像力あふれる神秘主義と、筋の展開とによって、読者の興味をつないでいる。

カール・ギェレルプは、学者であると同時に詩人であるという、二つの面を兼ねそなえた不思議な人物であった。彼の創造的な想像力と、幻覚にもとづくような詩作とは、彼の正確な知識と、いきいきとした知性と調和することが困難な場合が多かった。その初期の作品は、自然に湧いて出てくるというよりはむしろ哲学的とも言うべき、一般的で、時に不器用な記述により特徴付けられている。芸術的な形式がネグレクトされることも多いが、常にアイデアに富み、独創性を保証している。そのなかには、『ブリューンヒルド』や『ミンナ』のような、注目に価する作品がある。すべての花を集める詩人。疲れを知らずに探求をつづけ、ついにヒンズー教の神秘主義の真の領域に到達して、そこで深遠な思想と、真理と人生の謎を解明しようとする努力と、芸術家的本能との結合を見出す。これがギェレルプの第二期の要約である。情緒をはらんだ思考、魂に関する偉大な知識、美に対する強い欲求、それと詩作芸術とが、永続的価値を有する数々の作品を産み出した。『巡礼カマニータ』と『完成された者の妻』の作者は、「仏教の古典的詩人」と呼ばれるのにふさわしい。

(林　穣二訳)

十クローネ・その他の物語

TI KRONER OG ANDRE FORTÆLLINGER

林　穣二訳

目次

十クローネ TI KRONER ……13
祭りのあと POST FESTUM ……31
秋想 HØSTREVUE ……40
ループレヒトおじさん KNECHT RUPRECHT ……43
エルベ河のヘロとレアンダー ELBENS HERO OG LEANDER ……49
しだのかげで UNDER ØRNEBREGNER ……63

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com